
東方日輪録

くれいく

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

東方日輪録

【Nコード】

N7211Y

【作者名】

くれいく

【あらすじ】

生前？に何事も中途半端に終わっていた少女が新しい生を頑張るおはなし。

ブローグ

私はどうやら死んだらしい。原因は多分熱中症だろう。夏だったし、暑いというか熱い中歩いてたし。人通りもなさそうな場所だった。

わざわざ探してくれるような友人もない。親は親で夫婦仲良くやってることだろう。

私は孤独だった。いつもいつもやることが中途半端で、迷惑をかけた。そうしているうちに、周りに人が居なくなった。

一人になって、悲しくなった。どうしてこうなる前にもっとしっかりしなかったのか。

一人になってからはいつもその事だけを悔やんだ。悔やむだけで、動こうとはしなかった。

その結果がこれである。死んだとすればもう悔やむこともない。このままぼうつとしていれば意識もなくなるだろう。

……死んだと言うなら、今のこの思考は何なのだろうか。あれかなんでも中途半端で終わってた私だ。多分中途半端に死んで……いやいや。中途半端に死ぬってなにさ。半殺しじゃあるまいし。

とりあえず、閉じたままな感覚の目を開けよう。眩しいから奇跡的に死んでなかったりとか、神様（笑）とかの真っ白な部屋だったりとか、そういうのだろう。せーの。

「……まぶしい。いきってた？」

太陽が目に入ってきて、一瞬しか開けなかった。もそりと立ち上がって辺りを見回す。

「……みことなひまわりだけ。うん、こんなところらない。たぶんゆめだろう」

独り言である。まあ、どうせ誰もいやしな……

——夢じゃないよ。

声が聞こえる。というか頭に響く感じがする。

「えーと、幻聴頂きました？」

——残念だけど幻聴でもないんだ。

どうやら私の頭の中に妖精さんが住み着いてしまったようだ。

「私の中に住むなら家賃でも貰いたいな。あ、前払いでよろしく」

——住んでるわけじゃないけど、家賃というか説明でもしようか。

「説明ふりーず！ どうなってんのよ？」

——かくかくしかじか、というわけ。

「ふんふん。……分かってたまるかドアホウ！ ちゃんと説明しなさい！」

——……わかったよ。

「分かった。まとめると、君は君らであつて、ここに咲いている向日葵。私は君らから生まれた？妖怪。人は定住しだしたばかり、と」

——そういうこと。でも君は妖怪なのに妖力より魔力のほうが多いね。

人外宣告受けました。ついでにタイムスリップ？宣告も受けました。

どうしろと。

「まあ悩んでもしょうがないとして、妖力より魔力のほうが多いのか。どれくらいよ？」

——僕らには漠然と多いことしかわからないよ。自分でわからないのかい？

「わからないから聞いてるんだけど。まあ確かに私に力があるのは感じられるけども」

これはあれだな。修行しろとかそういう雰囲気。せっかく生きてた上に長生きできそうなんだ。頑張って修行をやり遂げよう。

……でもその前に。

「食料と屋根のある寝床だよね」

ということで、食料とねぐら探しになるわけだ。その前にまずは私の状況を確認しようではないか。

今は恐らく紀元前くらいだと思う。だから狩りもしくは採取によって食料を得ることになる。

まずは狩り。私は妖怪らしいのだが、この細腕では獣を狩るなんてとてもできないだろう。

力がなければ多いらしい魔力。使い方がわからん。アウト。周りには向日葵しかなく、武器になるような物もない。というか獣に遭遇したところでこっちが狩られそうだ。

次、採取。毒とかやだよ？というか向日葵しかないの。共食い？も嫌だ。

……あれ、詰んでない？

い、いやまだだ！まだ何かあるはず……！ていうか起きてからしばらくたつけどたいしておなかへってない。

どういうこつたい。向日葵の妖怪らしい。つまり植物。空には太

陽。あれだ、光合成でもしてんじゃないかと。

そう思ったところだなにかしら無意識にやってないか、自分の中を探るように目を閉じる。

うーん、何となく服から何か入ってきてる気がする。あれ、何か浮かんで……

「太陽光を操る程度の能力？」

わーい。ファンタジーっぽい？能力ゲットだぜー。

「……光全般じゃなくて太陽光って辺りが中途半端で私らしい。納得」

まあ、太陽の光だ。人工のライトの光とか、火の光がダメなだけで、太陽の光ならたくさんあるじゃないか。

とりあえず光を操ると考えよう。

まずは屈折を試してみる。おお、なんか視界が歪んだ。次は思いっきり……。

ぐにやぐにやになって気持ち悪い。1話目で吐く女の子とか嫌よ。……ん？なんか変なものの受信した気がする。

さて、何となくだが使い方がわかってきた。花、太陽の光。攻撃。とくれば……。えっと、光を集めて、ちよっとやりにくいな。あつまれあつまれー。こんなもんかな？よし。

「ソーラービーム！」

ジュッ

「……いやいや。ジュッて。真っ黒どころか溶けてるし……」

要加減。

現実逃避に話を戻そうね。なんだっけ、えーと。食料どうしようからの光合成フラグか。そうだそうだ。多分服に何かあるんじゃないかと。私じゃよくわからん。わからないのなら聞けばいいのよ。というわけで。

「向日葵さんや。ちょっと聞きたいことができたんだけど」

——いいけど、土溶かさないでくれないかな？燃え移ったら大変じゃないか。

「すみませんでした。予想と違う結果になって私もびっくりです」

——で、何なの？

「いやね、この服ってどうなってるのかなと」

因みに今着ているのは薄い緑のワンピース。髪は金色に。長さは…背中くらいかな。次、おそろおそろ下を見る。そこには大きくも小さくもないやはり中途半端な大きさのふくらみ。というか体形全く変わってないな。容姿は……わからん。

——その服は君の妖力、魔力を使って編まれたものだよ。汚れはつかないし、穴が開いたり破れたりしても妖力なり魔力なり込めれば元に戻る。

「つまるところ体の一部に等しいわけだ。それならまあ納得がいく」

葉緑素の代わりにでもなるのだろう。私の力で編まれたってのなら色とか変えられるのかな。濃くしたら光合成が活性化……

思いつきり濃くしたらお腹いっぱいになりました。本当にありがとうございました。食料問題解決。おいしーものがないからしばらくこつするかなそうだ。

さて、それなら能力で何ができるかためそうじゃないの。

で、日が暮れた。何ができたかっという、自分の周りの光を屈折させて見えなくする。まだ自分がいるところは不自然になっているらしいので要練習だ。

次に、某龍球の目眩まし技。さっきの屈折に疲れて遊び程度にやったら一発でできた。でも光がまだ弱いので要練習。

あれ、女の子がでこ出してぴかーってやだな。せつかくできたのにお蔵入りフラグが早速立ちました。

で、完璧に太陽が沈んでしまったため、することが無くなる。横になろう。

空を見上げる。真っ黒な空。まんまるおつきさま。ちりばめられている星々。現代では考えられない光景だ。

あ、晴れているので一番大きい向日葵の下で寝てます。目印になるしね。ついでに川教えてもらって顔確認しました。髪が金色になって目が茶色になっていたこと以外は変化なし。そこら辺に居そうな特別可愛いわけでもない顔がありました。ちくしょう、こういうときは可愛くなってるもんでしょ！

……愚痴ってもしようがない。夜は太陽がなくてあまり調子がでないし、寝よう。

「夜に使えないってかなり不便だな……。夜でも太陽がでてればいいのに」

まるい月を見る。あの光も使えるなら——って月の光って元々太陽の光じゃん！

ガバツと起きてから昼にやったのと同じことをする。

結論、かなり弱くなるけどできました。姿消しならむしろ楽にできたが。

……どちらにせよ、使えたものではないので多いらしい魔力で魔法を覚えよう。そうしないとつらそうだ。

「一日目終わり。また明日ね」

そういつて眠りについた。

2（前書き）

後半日記になっちゃいました。

おはようございます。暑いです。とりあえず無意識下の能力行使に常に涼しいか暖かいくらいになるよう陽射しを屈折するようにしたいです。

その前にこれからやること整理しよう。

まず今言った陽射しの無意識調節。第二に夜間に問題なく活動できるように魔法の最低限の会得。最後に移動手段の確保。

陽射しの調節に関しては日中のみやるとして、夜は魔法についてだ。魔法の次というか、魔法で飛行術でも覚えればいい。

「っとその前に」

——どうかしたの？

「ここって地球のどの辺り？ついでに人とかこのあたりこないの？」

——君の知識からいうと、アメリカ大陸とやらになるのかな。人は来るよ。僕らは育てられてるんだから。

大陸……だと……！

どうしよう。何となく地球のつて聞いたけど、そりゃあ定住始めたばかりで日本に向日葵なんてなかったはずだとも妖怪がここにいるんだし別に実は日本でだって

——なんかすっごい汗流してるけど大丈夫？葉で影でも作ろうか？

「何気ない気配りが嬉しい……ってそうじゃない！」

大陸。大陸なのだ。列島ではなく大陸。もし飛べなかつたら泳ぎ？もしくは水面でも走れと……？無理だろう。私は足が沈む前にだのできない。なんとしても飛行術を覚えなければ……。

「暑さどうにかしたら魔法覚えるんだ……」

とりあえず、姿を消さずに暑さの元である熱の部分だけを屈折させることから……。

日が暮れた。全くできない。夜だとあまりわからないので魔法へ移行することに。

やることは簡単。精神統一をして魔力をしっかりと把握する。そしてそれを自在に操ることができればいいわけだ。

「……まぶしい。なんであさになってんの」

座禅をしていたつもりが寝ていたらしい。まあ、日が昇っている
ので屈折に……。

日が暮れた。座禅。寝てた。屈折。日が暮れた。座禅。寝て……。

さて、涼しくなってきたよ。皆さん。どうしましょうか。
というのは置いといて、魔力と妖力は分けることができた。魔力
が多いとか言われてなかったらどっちがどっかわかんなかったけ
ど。さあ、次だ。ここからが本番だ。

「魔法の修業そのいち。体の外に出して操ってみよう」

——誰に言ってるの？

ビクウツとして顔を赤くする。

「ずっと話し掛けてこないから君がいること忘れてた……」

まあいい。某狩人漫画から拝借して、指先に丸めた魔力を浮かべて……。浮かべ……。う……。か……。ばない！

魔力を浮かべようとして早一週間。ようやく体から離れてくれました。こんな調子で飛べるようになるんだろうか……。

浮いた瞬間BANとかないよね。あつてたまるか。屈折に関しては熱のみを屈折させるというイメージがうまくいかず、苦戦している。やろつとしたら姿まで見えなくなるらしい。年単位でやることを覚悟しよう。あきらめずに遣り遂げることを目標に。

一ヶ月後。ある程度上手く操れるようになったら数を増やして、としている。数が増えるという成果があるから楽しい。

だが屈折はいまだにできない。翌日から夜の修業を飛行に変えた。人類の夢だ。いやもう人じゃないけど。

更に一ヶ月後。向日葵の一番大きなもの以外全て種を残して枯れてしまった。少し悲しくなったが、仕方ない。しばらくすると種を採りに人がやってきた。声を掛けようと思ったが、ここは大陸。言葉が通じるはずもない。隠れてやり過ごした。すぐに浮くことはできた。しかしバランスがとりづらい。寒くなってきたが、光を集めれば問題はなかった。少し眩しい点を除いて。

また夏になった。私が目覚めてから二代目になり向日葵達。相変わらず大きい。

飛行はスピードを出せばバランスをとれるようになった。しかし燃費が悪いのか、すぐに疲れてしまう。

あとある日を境に妖力のほうが大きくなった。これは一年を境にしてあるのかな？そしてでかい向日葵は更にでかくなった。私が近くで生活しているからか？

向日葵が三代目になった。屈折はまだできない。熱を屈折させようとしているからダメなのかもしれない。飛行も別の視点から見てもよう。

まずは熱について。私の能力は屈折させるのではなく、操るのだ。無理に屈折にこだわらずに熱の部分を制限すればいいのではないか。……できた。あっさりできた。三年間の苦労はなんだったんだ……。まあ一回飽きて球状に全反射するように能力使ってみたらそこが小さな太陽のようになって焦ったのはいい思いでだ。

さて、次は飛行だ。コントロールと燃費の問題がある。が、まずは視点を変えてみる。

今はただ魔力で飛ぶようにしている。魔力。魔力を使い不思議なことを起こすのが魔法・魔術だ。魔法といえば火や氷、水、風などの属性だろう。

いまやっている飛行を無属性だとして、風に乗るように、つまり風属性を意識してやればいいんじゃないの、と。

……思ったものの、風がそれなりに強く起きるだけだった。

術式なんて小難しいことを無理だ。凡才で基礎すら知らない私に作れるはずがない。力技だ。

それから、というものの、追い風を起こしつつ飛ぶようにすればスピードが出るようになった。後は太平洋を渡れるだけの飛行時間

を確保だ……。どれくらいだろうか。

「今はただ……飛び続けるだけ……」

2 (後書き)

次回、キンクリ。

3 (前書き)

原作キャラ出ました。
あと名前も。

どうも私です。あれから早くも五十年ほど、飽きもせず飛び続けました。ついでに妖力も使って飛べるようになりました。

どうも私は常駐スキルと言うものが苦手らしく、常に。。。しておくと、ということができないらしい。寝てたらすっごい寒かった。

あと途中で別の魔法に逃げた。飛びながら。でもやっぱりよくわからなくて全然ダメだった。やっぱり基礎は大事。

能力タンク？が2つあれば、行けるはず……。というが無理だったら泣くしかない。いや死ぬ。

言葉が通じないここにいるのは辛い。向日葵は、向こうで育てれば離れてても問題ないとか。というわけで種をもらいました。

「それじゃあ、私は行くね。広い場所見つけたら君ら植えてあげるから」

——そう。少しの間寂しくなるね。ああ、これも持っていきなよ。

でかい向日葵。五十年間一度も枯れなかった。ついでに恐ろしくでかい。君の服と同じような物だよ。

「なるほど。今はまだ使い道が思いつかないけど、何か考えてみるよ」

——それじゃあね。また話そう。

「うん、またね」

別れになる。が、持っている種を植えて育てれば大丈夫だ。ずっ

と別れるわけじゃない。

私は、東へと飛んだ。

——日本列島とやらは、西に飛んだほうが近いよ。

「えっ」

こっぴどいやりとりがあったのは気のせいだ。

三日後、無事に日本についた。一日ハワイであろう島で休憩して。

「まずはあれだ。向日葵植えるのは場所を選ぶだろうから、人を探そう。というか何か食べたい」

どこへ行こうか。そう考えながら休憩する。適当に移動して襲われたりとかしたくないし。血を見るのはたぶんダメだからソーラービームで跡形もなく消せば……。こっちのが危ないか？こんな思考してるのも妖怪になった影響か。

「妖力でも魔力でもないなんかでかい力？と私なんか比べものにならない量の魔力。どっちのところへ行くか」

前者。何となく近寄りがたい感じがする。かなり昔な訳だし、神様とかかもねー。私妖怪だし、退治されかねない。

後者。私は魔法使いでもある。魔力持ちなら魔法を教えてもらえないだろうか。そんな短絡的な思考で魔力の元へと向かった。

「そんなわけで魔力の元に到着しました。でも何もありません。どうしましょー」

ううむ……。と唸っているとなんか入り口みたいなのができた。入ってことだろうか？

「……お邪魔しまーす？」

何故か疑問系で挨拶しながら入る。突然攻撃されたりとかしないよね。

それなりに長かったトンネルみたいな空間を抜けた。そこにいたのは……。

「いらっしやい、新米魔法使いさん。歓迎するわ」

と、赤というより紅のローブに銀色の髪でたくましいサイドテールを作った女性がいました。

「あ、ありがとうございます。いつ私が居たことに気付いたんです？」

用意してましたと言わんばかりのご挨拶。

「あなたがこの島に来たあたりからね。私は神綺。ここは魔界ね」

「魔界……。魔界ですか」

本気でファンタジー。しかもラスダンとかじゃないの？

「ちなみに私は魔界神やつてたりするわ」

ほうほう、魔界神。まかいしん。魔界の神様……。。

「な、なんだってー！」

ラスボスじゃないっすか！魔界のトップに直々お出迎えされる私。どういうことなの。

「な……なんで魔界の頂点サマがいるんでせうか？ああ、敵は排除とかいうあれですね。さようなら向こうにいるみんな……」

「何を勘違いしてるか知らないけど、違うわよ」

「へ？じゃあなんで……」

「魔界神とは言っても、まだ魔界ができたばかりなのよ。だからお出迎えして大丈夫そうなら色々手伝ってもらおうかと、ね」

「はあ……。あ、自己紹介がまだでした。私は日向葵です。向日葵の妖怪やってます」

あ、どうも。名前言ってなかった気がするけど今言った通り日向葵です。生前からこの名前です。

「じゃあ葵ちゃんね。葵ちゃんがよければひまちゃんでもいいけど……」

「……ひまちゃんはやめてください」

おそらくひまわりからだろうけど、なんか嫌だ。

「まあ立ち話も何だし、うちに行きましょう。家族も紹介するわ」

家族がいるらしい。神様家族か……。

で、神綺さんの家。というか館。でけえ。

「アリスちゃん、夢子ちゃん、ただいまー！新しい家族ができたわよー！」

はは。何をおっしゃるこの神様は。いきなり家族だなんて。
ドタドタ、と走るような音が聞こえる。少しずつ近づいてくる。
ドタン。あ、こけた。

「ママ！どこの男引つ掛けてきたの！？それとも攫い！？」

親が親なら子も子か？と少しの後悔を心の片隅に感じていると、
一瞬でそれは消えた。

足音が消え現れた姿に目を見開いた。そして思わず呟く。

「可愛い……」

「女の子……ってことは攫ってきたのね！」

なんか思考が変な方向に行っている幼……女の子。これは訂正しなければ。

「私は攫われてきたわけじゃないんだけど……。魔界にきたら神綺さんに案内されただけだし」

「あらそうなの？ていうかママちゃんと説明してよ！」

あらあら。元気ねー。とニコニコしている神綺さん。のんびりした人？だなあ……。

「えーとね。この子は日向葵ちゃん。魔界（まがい）の新しい住人で……」

「ちょっとまって。ここじゃなくて座って紅茶でも飲みながらしよ」

なんかお母さんがのんびりな分子どもがすっかりしてるみたいだ。大変そうだなー。

「今の話の通りならあなたも一緒になるのよ」

心を読まれた。

で、テーブルにつくと夢子さん？が紅茶を持ってきてくれた。喉が渴いていたのでいただく。

「はふう……」

「……なんで紅茶飲むなり泣いてるの？どうかした？」

「いや…五十年ぶりに味があるもの口にしたから……」

「「ご、五十年！？」」

めっちゃ驚かれた。

「夢子ちゃん！急いで夕飯！」

「はい！すぐに用意します！」

ご飯もすぐに用意された。

美味しいものが食べられ、今までにない満足感と安心感が得られた。

「えと、夕食まで用意してもらって申し訳ない……」

「いいのよ。今日から私の娘になるんだから、遠慮しないの」

「いいんですか？私みたいなよくわからない人を家族にして」

「ママがいつって言うてるんだからいいのよ、お姉ちゃん」

「アリスちゃんも認めてるし、あなたさえよければ」

孤独になって約半世紀。他人に必要とされたのは初めてかもしれない。それが……こんなにも嬉しいものだなんて……。

答えは、決まっている。

「私なんかでよければ、よろしく願いします」

「詳しいことは明日にして、今日は寝ましょう。みんなで！夢子ちゃんもよ！」

「はい！」

「わかりました」

六十年ぶりの人の温もりは、暖かった。

3（後書き）

何故か娘に……。どうしてこうなった。

ラストは何となく考えてたけど全然違う方向にいきそつな気がするなあ……。

4（前書き）

携帯を支える小指が痛い。

どうも私です。昨日は久しぶりに美味しいものが食べられ、優しい人たちに囲まれて、柔らかいベッドで寝ることができました。

起きて可愛らしい寝顔が目の前にびつくりしたのは仕方がないはず。ちなみにアリスちゃんの方です。夢子さん、アリスちゃん、私、神綺さんの順で寝てます。

「……起きれないけどこれならいいやあ」

可愛いっていいよね。神綺さんは可愛いよりの顔だと思う。夢子さんは美人さんだ。

「う……ん……？」

そんなことを思っているとアリスちゃんが目を覚ましたようです。

「あ……お姉ちゃんおはよう」

「おはようアリスちゃん」

お姉ちゃんと呼ばれることもおはようと挨拶されるのも慣れないけど、挨拶をされるのはいいものだ。

え、向日葵？あれはなんていうか、自分みたいなものだし……。

「おはようございます。起きられましたか」

「ママはまだ寝てるみたいだけどね。朝ご飯の準備しよっか」

「わかりました。準備してまいります」

「夢子は堅いなあ……。もっと楽しんでいるのに」

一応メイドさんのようだし、こんなものではないのだろうか。それはそうと……。

「あの……」

「どうかされましたか？朝食にリクエストでも」

「いえ、できたらその……料理を教えてもらえないかと」

人のときは一応食べられる料理は出されていたし、気に入らなければ買うこともできた。だがそのために料理をしたことがない。女としてどうかという意見は無視させてもらおう。

妖怪になってからだって昨日初めて料理というか水以外のものを口にしたのだ。料理ができるわけではない。

「いいですよ。朝なので軽いものですが。では、キッチンへ行きましょうか」

「私もやるー！」

引き受けてくれた。アリスちゃんも元気よく意志を示す。

……メイド服だとか、カタカナ英語だとか、気にしてたまるか。

そして、朝食ができたところに神綺さんが起きてきた。

「神綺さ「ママ」……おか「ママ」……お「ママ」……ママ、おはよう」

「葵ちゃんおはよう」

……怖かった。ただ純粹に怖かった。笑っているのに目が笑っていないかった。ママと言った瞬間戻ったが。

「葵ちゃんは家族で娘なんだから、神綺さんなんてよそよそしい呼び方しないの」

母は強し、というやつか。

「はい。わかりました」

「ん。よろしい」

満足したようにテーブルにつく。それに続いて私も座る。

「ママ、今日は私とお姉ちゃんも手伝ったんだよ!」

「本当?偉いわね」

えへへー、と笑いながら撫でられるアリスちゃん。わ、私にも手

が伸びてきた。……撫でられるのも悪くない。

「それじゃあ、頂きましょうか」

昨日も得られた確かな温もりを感じながら、朝食をとった。

で、食後のティータイム。

「じゃあ、いろいろと説明しましょうか。あなたも自分が話せる範囲でいいから、説明してね」

まずは改めての自己紹介だった。

神綺ママは魔界神で魔導を司る程度の能力を持つこと。

アリスちゃんも神綺ママの娘ということになっているが、実は魔界にいる人は神綺ママに創られた人であるか、創られた人どうしの子供であるかで、アリスちゃんも例外ではないとか。ちなみに能力は魔法を操る程度の能力。

夢子さんは創られた存在だが、神綺ママより強いらしい。

私は種族と能力、ここに来た理由を話した。魔法については普通に教えてくれるらしい。

「で、私は人間だったんだけど、気が付いたら向日葵畑にいて、その向日葵達に妖怪だって言われたの」

「うーん。原因はわからないわねえ……」

「わからなくなっただけいいよ。人間だったころはさんざんだったし。妖怪になったからこうして会えたんだし」

妖怪になってから五十年は辛かったが、今のこの状況になるための試練だと思えばなんてことはない。

「嬉しいこと言ってくれるわあ……」

私だって嬉しい。

「あ、聞きたいんだけど、向日葵育てられるような場所ない？結構大きくなるからそれなりに広いところがいいんだけど……」

向日葵たちとの約束がある。あつちに置いてきてしまったのだから、早めに行動しておきたい。

しかし、帰ってきた答えは否だった。

「たぶんダメね……。こことむこうの土は合う植物に違いがあって、両方大丈夫なのはほとんどないの」

安易に場所だけ求めてもダメだったか……。なら向こうで育てるしか……。いやでも気軽に行き来できないから……。

「向日葵に関しては今はどうしようもないし。別のことを考えようか」

「葵ちゃんがいいならいいんだけど……。じゃあ、魔法講座でもしましょうか」

すぐに魔法を教えてくれるようだ。時間はたくさんあるし、急がずゆっくり覚えていこう。

……どうやって使っていたかを聞かれて実演したら、よくそんなやり方で海横断できたねって感心された。少しだけ悲しくなった。

4（後書き）

因みに未来がどうかは話してません。意味がないと判断したため。

どうも私です。アリスちゃんにさえ私の使っている魔法は酷く見えるらしいです。何でも純粹な魔力だけなら神綺ママに次いで多いらしい。というかそれだけ魔力がないと術式なしで飛行すらできないらしい。妖怪ってか魔界神の次に多いって魔王じゃん。

「魔法使いなら妖怪に含まれるのよ。というか魔力があるのは魔法使いの証じゃない」

何を言ってるんだと言わんばかりに笑われた。心を読まないでほしい。私には常識レベルから知識が足りないらしい。そこから勉強することになった。

「そうねえ……。ママお仕事してくるから、復習も兼ねてアリスちゃんにお願いできるかしら？」

「はい！」

年下……。しかも妹に常識教えられる私エ……。仕方ないんだ……。！この世界でちゃんとした知識持つてる人にあつたのは皆が初めてなんだから……。！

「じゃあ、準備してくるからちょっとまって！」

少しばかりの言い訳をしていたら、ててて……。と走っていった。夢まった。神綺ママも頑張つてねー。と一言残して去っていった。夢子さんは既にお仕事です。

待つこと数分、アリスちゃんが戻ってきた。

「では、講義を始めます」

……眼鏡をかけて。可愛いなあ……。

で、教えてもらったのは世界、種族、魔法の基礎。

世界には、現世・魔界・地獄・冥界・天界があつて、魔界は知つての通り神綺ママが。地獄・冥界は閻魔様たち（複数いるっぽい）。天界は当時の仙人、今でいう天人が要石を引き抜いてきたんだとか。

他にも月に行ったという人間がいるそうだが、こちらはよくわかっていないらしい。

魔界には魔力、地獄・冥界・天界には霊力がたくさんあつて、そこにいると成長しやすいんだとか。便利だな。神力は神社とその周り、妖力は妖怪が長く住む場所にたまる。

その妖怪は、一人一種族の妖怪と、勢力をもつ妖怪がいる。上げていくとキリがないのであえて言わないらしいが。

そして、魔法。最初は陣と呪文で構築して、呪文のみ、陣のみで発動できるようになったあとに陣と呪文なしで、というステップを踏むのが普通。陣も呪文もねーよ。何かしら考えて唱えてみても効果あつたのかな……。まあ、きちんとした呪文や陣があれば威力は全然違うらしい。だからどちらかは大抵使う。

新しい魔法を作らず、既存のものを覚えるだけなら、陣か呪文どちらかだけでもいいらしい。両方覚えて損はないが。で、基礎中の基礎である魔力弾にも一応呪文や陣はあるわけで、それを教えてもらい、そちらで生み出した。

確かに楽だ。振り回される感じがまったくしない。調子に乗って出しまくってたらアリスちゃんに呆れられた。

それから数年。魔法をのんびり覚えながらのほんと過す傍らに、魔界で向日葵を育てられないか試していた。現世の土と魔界の土を混ぜたり、現世の土のみを使ったり。花が咲いている所から少しずつ拝借したり。たくさん試したが、どれもダメだった。土どころか気候とか別の何かも関わっていそうだ。

そういう原因が分かる訳がない私は、今日も土探しに出ていた。今日はこっちに行こう、と歩きだした時だった。

「こんにちは。ちょっといいかしら？」

不意に声をかけられ、振り替える。緑色の髪、タータンチェックのスカートにベスト、白のブラウス。そして日傘をさしたやっぱり美人さんが笑顔で立っていた。

「はい、なんでしょうか？」

なんか怖い。そしてこの恐怖は以前味わったことがある。魔界にきて二日目、神綺さんと呼ぼうとしたときと同じ恐怖だ。目は口ほどに物を言う。よくわかった瞬間だった。逆らえば殺す、と。

「いえね。ここ数年土を集めている奴がいるそうなの。それも花が咲いている場所ばかりね。何か知らないかしら」

何か知らない、ではなく、お前がやったんだろ？って聞こえた気がした。

「……それは多分私のことです」

「へえ、何のために？」

これは正直に言わないと本気で死ぬ。残り少ない本能が叫んでいる。

「私が住んでいるところで、前に居た場所から持ってきた種があるんですが、なかなか育たなくて。色んな土を試していたんです」

種を取り出し渡す。そう、と言った瞬間に恐怖が消えた。地雷は回避できたらしい。

「風見幽香」

「ふえ？」

なんか変な声が出た。恥ずかしい。

「風見幽香。名前よ。あなたにもあるでしょう？」

「ええまあ……。日向葵です」

一応下手に出る。風見のほづが格上なのだ。警戒はしておいて損はない。

「そんなに警戒しないでよ。初めて会った花好きの妖怪なんだから仲良くしましょう？好きに呼ぶといいわ」

損しかけた。友好的な態度を損ねてくれなくてよかった。

「じゃあゆうかり「幽香と呼びなさい」……イエス、ママ！」

冗談の通じない人だ。

「ふざけてたらどうにかなってそうだ……。肥料とか」

「ふふふ。私の家に招待するわ。あなた飛べる？」

飛行なら魔力弾の次に教えてもらった。だから……。

「大丈夫よ、問題ないわ」

なぜか死亡フラグがたった気がした。

「ふわぁ……。綺麗……」

ついた場所はテーブルに椅子、小さな家。それ以外の場所には花が咲き乱れていた。道すらないので飛んでいく必要があるが。

「気に入ってくれたかしら？」

幽香が満足気に聞いてくる。私の反応が嬉しいのだろう。

「こんな素敵なおところに住んでいるなんて、いいね。手入れが大変そうだけど」

「花が好きならなんてことはないわよ。ところで、この種はみたことがないけど、大陸の花なの？」

「そうだよ。向日葵っていう花。たぶんこの土なら問題ないから、育てたいならあげるよ」

意外そうな顔で見られた。

「あら、いいの？もう少しみたいだけれど」

「もうさんざん試してダメだったし、花好きさんにならまかせられるでしょう」

「まあ、あなたがいいのなら受け取るわ。それで、これは……」

そして、暗くなるのにも気付かず、二人で話し込んだ。趣味の合う友人ってのはいいね。

……連絡せずに一晩戻らなかったのも、ママに泣かれ、アリスちゃんに怒られたのは、余談である。

5 (後書き)

感想とかがくれると喜びます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7211y/>

東方日輪録

2011年11月24日21時03分発行